

リア充

第8期生 佐藤 遼太郎

このエッセイ執筆を機に、もう一度ここ2年近くを振り返ってみた。留年もしたし、入ゼミイベントにほとんど参加せず、入ゼミのエントリーシートは大量の白紙スペースだった他の2年生とはかなりかけ離れていた自分。今でも入ゼミ試験の一日のことはよく覚えている。心構えはできていたが、面接では予想以上に人格を否定されたような気分になった(笑)。試験が終わり合格の通知を受けたあとの懇親会では、先輩方に「お前はみんな入れたいって言ってた」と聞かされる。素直にすごく嬉しかった。中学生の頃は部活で「お前は生意気だ」と言われんばかりに先輩と衝突してきたし、高校でも続けてた部活を途中で辞め、非常に気まずい時期を過ごしたりもした。そんなふう生きてきたので、先輩に可愛がられるというのは初めての経験だった。だから期待を裏切らずこのゼミで頑張っていこうという覚悟ができた。

さて、覚悟はできたものの、待ち受けていたのはグループワークと課題の数々…。気が滅入りそうにはなったが、7期の先輩方が日頃からゼミ後に飲み会などを開いてくださったり、当時家が非常に近かった同期の我田とお互いの家に集まりながらレポート作成作業をしたりしたこともあり、なんとか課題をこなすことができた。

7期の上田さんの熱心な勧めもあり、自分は8期三田祭論文執筆プロジェクトのマケ論代表として執筆活動に取り組むことになった。相原・樋口・荻野・鈴木・我田の5人のメンバーと半年執筆活動をともに過ごしてきたわけだが、個性なのか主張が異なりすぎて代表としても苦勞することがあった。しかし、そういう個性が論文をより良いものにしていくんだなと感じることができたし、何よりそういう苦勞があったから論文執筆活動を終えた達成感もあり、美味しいお酒が飲めるわけなのだ。

今年度に入り、9期生が入ってきたわけだが、何分年齢差からして弟や妹のような存在であるため、ついつい上からの物言いになりがちだった。有り難迷惑に思った9期生もいるかもしれない。ごめんなさい。

自分はこれで大学を6年間過ごした。世間的にはよくわからないが、自分はここ2年が最も「リア充」だったなと感じる。それは小野ゼミという環境があったからだ。だから、自分にとって小野ゼミとは、野村再生工場のようなダメ人間を更生させるような組織だと思う。来年度もお世話になります。



忘年会にて、9期生からお礼の品をもらった著者(右)